

『新・やまと物語』（第9巻）

タイトル

- 第57章 〔日辺日本国の天皇〕清寧天皇（白髮武廣國押稚日本根子天皇）
第58章 飯豊天皇
第59章 顕宗天皇〔弘計天皇（弟）〕
第60章 仁賢天皇〔億計天皇（兄）〕
第61章 武烈天皇（仁徳系の王統最後の天皇）
第62章 時代の圧縮
第63章 第一期二朝時代の終焉
第64章 第二期二朝時代の幕開け
第65章 欽明天皇（天國排開廣庭天皇）
第66章 敏達天皇
第67章 用明天皇
第68章 崇峻天皇（朕が嫌しとおもふ所の人を断らむ）

新・やまと物語 (9)

こ が けい さく
古閑炯作



画像提供：東海大学情報技術センター



画像提供：東海大学情報技術センター

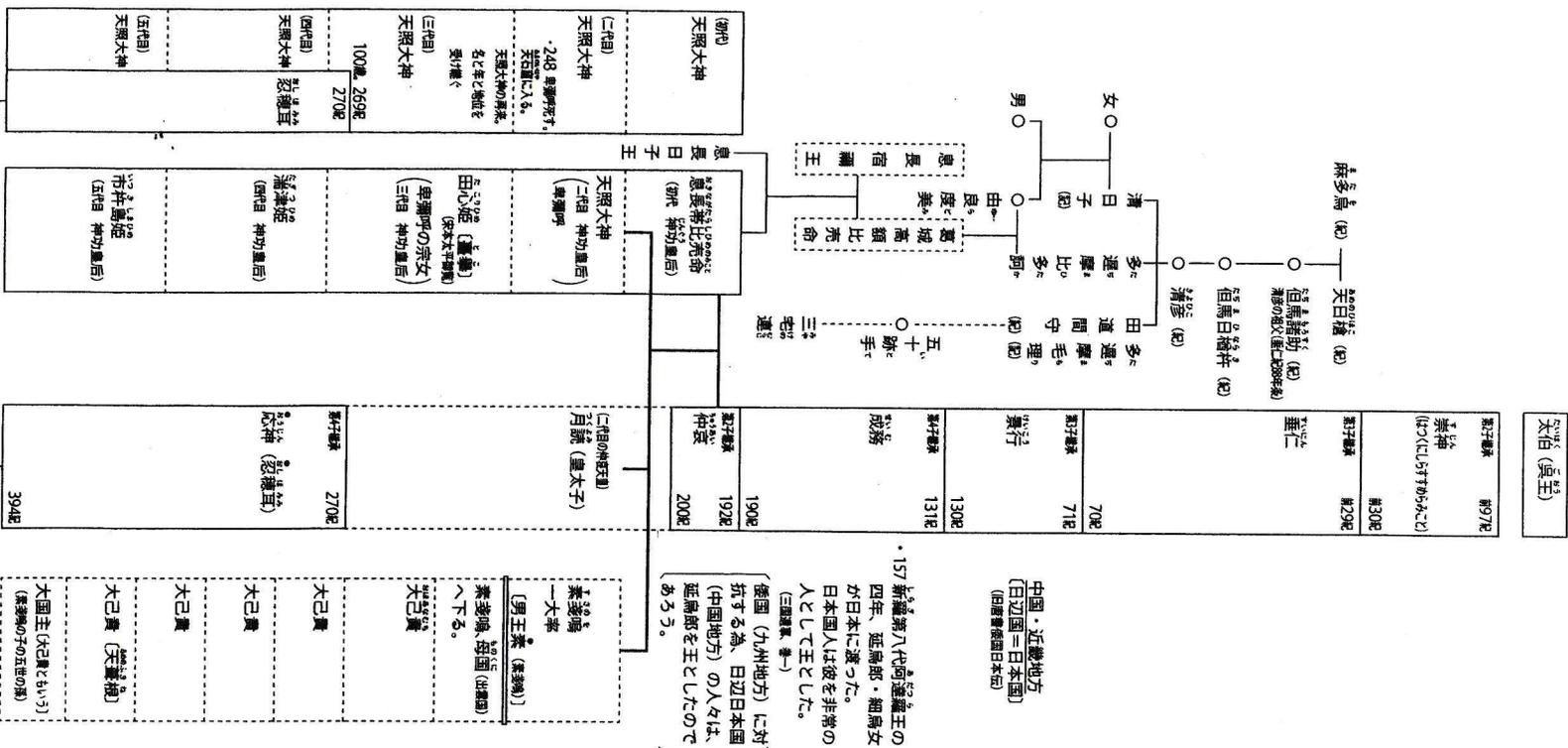
9卷



(拡大映像)

A3に印刷

万世一系の思想によって作られた系譜 (記・紀の系譜) ← この物語における系譜 →



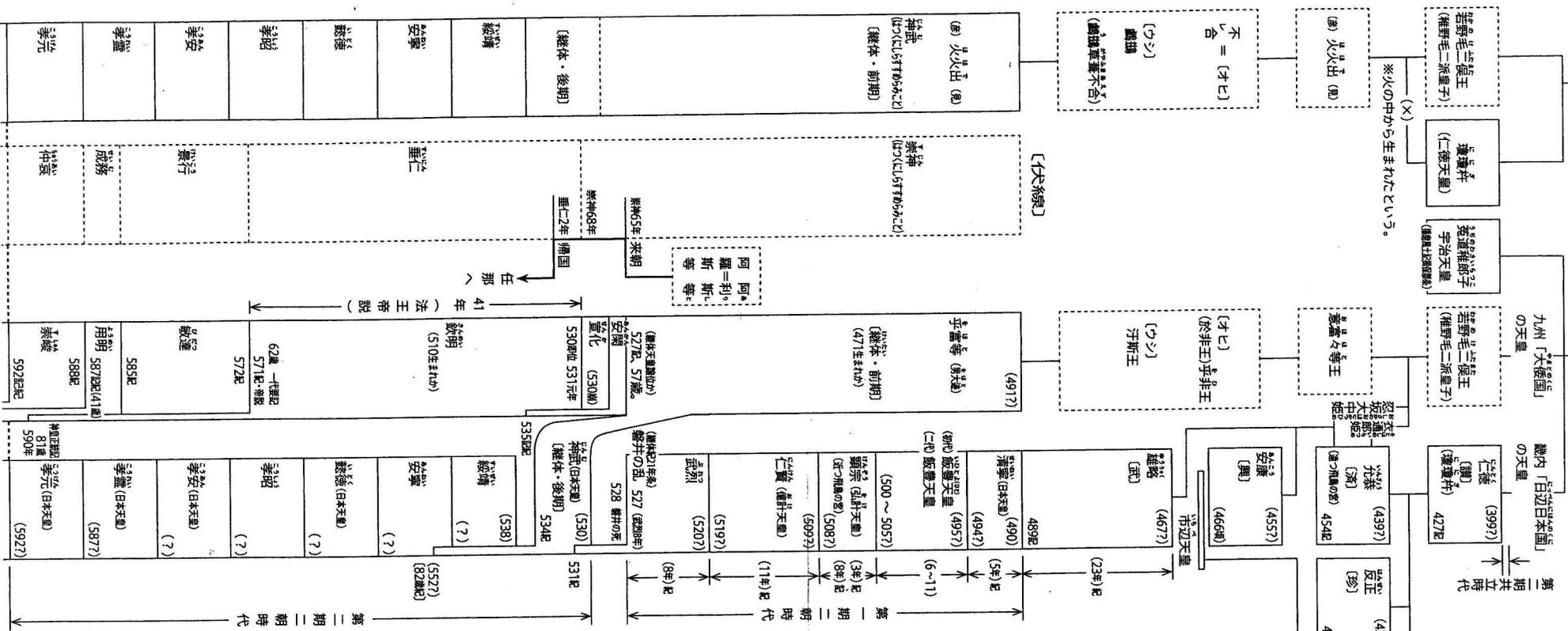
皇孫神代が皇孫姫をしりぞけたので、これより以後、天皇帝等の命が短くなった(記)つまり、皇男(皇女)が継承している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、皇孫神命(仁徳天皇)の時に廃止され、これに替わって、大連の王位継承法が採用されることになったのである(記)。

これより後、王位は、複線に継承されてゆくことになる。

- ・ 61 極南界の倭奴国が奉皇朝賀した。(後漢書倭伝) 由道前守を第世国(元の蘭越のことであろうか)へ遣わす。
- ・ 71 籍を持ち帰った由道前守、病死する。(記・紀)
- ・ 107 倭国王帥升は、生口百六十人を獻じ、請罪を願った。(後漢書倭伝)
- ・ 147 桓・靈の亂、倭国大乱。(後漢書倭伝) (倭国と冀州国との戦いであろうか)
- ・ 188 *北九州・山口地方の小國群集。神代皇后、朝鮮半島南端の狗奴韓国を新羅の奴国(今を「邪馬台国」(八女土国)と呼称するようになったか。
- ・ 200 皇孫神代、朝野半島南端の狗奴韓国を新羅の奴国(今を「邪馬台国」(八女土国)と呼称するようになったか。
- ・ 247 倭の女王卑彌呼、狗奴国・男王卑彌呼呼素と不和(倭使入伝)
- ・ 248 皇孫神代、男王(素戔嗚)立つ。皇孫神代死す、当時、千余人を殺す。
- ・ 266 素戔嗚、出雲國(今の近畿地方)へ下る。素戔嗚は、中国山脈の山奥に下っていったのだから。(記)三皇子誕生(他参照)
- ・ 299 神代皇后、晋の武帝泰初二年に晋朝。(記)晋の力が弱まった。高句麗は楽浪郡(平壤あたり)を併呑。
- ・ 313 高句麗は、引き続いて常陸郡を占拠す。
- ・ 314 *この頃、高句麗は、馬韓(百濟)・辰韓(新羅)を屬国としたのである。
- ・ 331(年未詳) *この当時、馬韓から百濟へ、辰韓から新羅へと國名が変わったようである。
- ・ 372(2) 百濟、七夜刀を、倭国に獻上。(干支支連羅り下) *七夜刀に泰和四年(369)の政有り。
- ・ (7) 天護聖烈を獻上、阿蘇の火を三輪山に移す。中つ國(東の狗奴国)を平定。新羅終焉。
- ・ (7) 出雲國(近畿地方)の國領り。
- ・ (7) *大國主、今の出雲に新しい出雲國をつくる。
- ・ (7) 応神天皇、難波に大饗宮を造宮。
- ・ 391 広瀬土王即位。
- ・ 396 広瀬土王、船(みすから)水軍を率いて百濟を討ち、多くの城を落す。(広瀬土王即位)
- ・ 400 高句麗が倭軍を任那加羅まで追撃。(広瀬土王即位) 倭軍は、帯方の地にまで侵入して高句麗と戦ったが、大敗。(広瀬土王即位)
- ・ 404 京畿道北部で、再度大敗。(広瀬土王即位)
- ・ 407

新・神代物語 第巻第1表 から転写して下さい。 決り新しく作らないで下さい。 4ページの交代だからです。

※が、切断の線の入カーン。



- 413 倭王、東晉に入門。(晋書安帝紀)
- 420 東晋亡び、宋起る。
- 421 倭王讃、宋に入門。(宋書倭国伝)
- (仁徳天皇)が仁徳天皇の字を当てたといわれている
- 425 同上
- 430 倭国王、宋に入門。(宋書倭国伝)
- (仁徳天皇)が仁徳天皇の字を当てたといわれている
- 仁徳天皇も履中天皇も、共に「讃」という名で朝貢したのであろう。

- (433?) 讃(履中)が死んで、弟珍(反正)立つ。
- (?) 倭国王珍(反正)、宋に入門。(宋書倭国伝)
- 438 倭国王珍(反正)、宋に入門。(宋書文帝紀)
- (仁徳天皇)が反正天皇(履中)に代わったか
- 443 倭国王済(分恭)、宋に入門。(宋書倭国伝)
- 451 済(分恭)死す。世子興(安履)、使いを遣わして貢獻。(宋書倭国伝)
- 460 倭国王を遣わして貢獻。(宋書孝武帝紀)
- 462 倭王世子興(安履)を安東將軍・倭国王とする。(宋書倭国伝)
- (?) 興(安履)死んで、弟武(雄略)立つ。
- (宋書倭国伝)
- (489B) 雄略天皇紀の遺詔に雄略・高祖紀の文章を点検したものが、この両書ともに、「天下を共治すること」を望んでいる。(ここに、二期時代が出現したと考えたい)
- 井桑隱記は「阪蓋天皇、廿四代女帝」とし、皇胤統運は「阪蓋天皇、忍海辺女王是也」といひ、両書とも天皇とする。
- 503 (503B) 厩戸王(仁徳天皇)の次子に解したい。
- 「白十六王」(阪蓋天皇)の次子、年八月、男弟主(太子履計王)が意奈加加宮(意奈宮)に在す。斯處(百濟)に代置天皇(仁徳天皇)に在す。今州利二人等を遣わして、この朝を作る」
- *男弟主であるから、日十六王は女性(弟)なのだろう、と思われ。

- 526 日本書紀紀年の継体20年(526)は、武烈7年なのであろう。(継体紀20年条参照)
- 527 「磐井の乱」は、二期の戦いの一端を示しているようである。(継体紀21年8月1日条末尾題) 神武天皇(継体天皇重演)、日辺日本国(近畿)の瀬原宮で即位か。
- (530?) 欽明天皇即位。(帝紀)
- 530 「辛酉の年(531)に『日本』の天皇及び太子・皇子がともに死んだ」という奇怪な記事を日本書紀は載せている。(継体紀25年条)
- 531 「日辺日本(近畿)の武烈天皇及び太子・皇子がともに死んだ」ということを示唆しているのかもしれない。
- 534 継体天皇(神武天皇)退位か。(継体紀25年条)
- 538 欽明朝の戊午年(538)、畿内に仏教伝来か。
- (552?) 継体天皇、崩御か。(82歳紀)
- 552 壬申年(552)、大倭国(九州)に仏教伝来か。
- 562 任那(日本南)新羅に遣はされる。百濟(新羅28年)の亂として請いてきた「物死」の葬。(継紀28年条参照)
- (継紀28年)に始まった殉死は、仏教を敬う欽明天皇によって、禁じられたのであろう。
- 但し、殉死は孝徳天皇大化二年迄続く。
- 厩戸王(仁徳天皇)の皇子(聖徳太子)誕生。
- 法隆寺釈迦像(光背銘文の聖子の年から逆算。仁徳太子、聖徳太子、日本(仁徳太子)66歳)
- 574
- 587 物部守屋を討伐。
- 592 「朕が嫌としておろす所の人を断らむ」といふ崇峻天皇の詔を聞いた蘇我馬子は徒党を集めた。東漢直御は、東(近畿地方)の孝元天皇を殺せまつったのであろう。

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

・右頁に掲載下さい。
 ・『新・やまび物語』
 第三巻 第3表から
 転写して下さい。

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期	前300		縄文人		
				当初の弥生人渡来		
				【箕子達による】 百余国の時代		
弥生時代	前期	前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。 箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。 (『三国志』韓伝)			
				(7~80年)		
				(1)		
				(2)		
弥生時代	中期	前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位(紀)			
				(1)		
				(2)		
				(3)		
弥生時代	後期	B.C. A.D.	・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 ・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。 ・147 } 倭国大乱 ・188 }	(1)		
				(2)		
				(3)		
				(4)		
古墳時代		-300	・(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐔文化圏を併合)	(1)		
				(2)		
				(3)		
				(4)		
古墳時代		-400		(1)		
				(2)		
				(3)		
				(4)		

【箕子達による】
百余国の時代

倭奴国(極南界)

【倭人による】
30余国の時代

(1) (2) の位置を
同じにして下さい。

(破線)
赤い点線と引くと

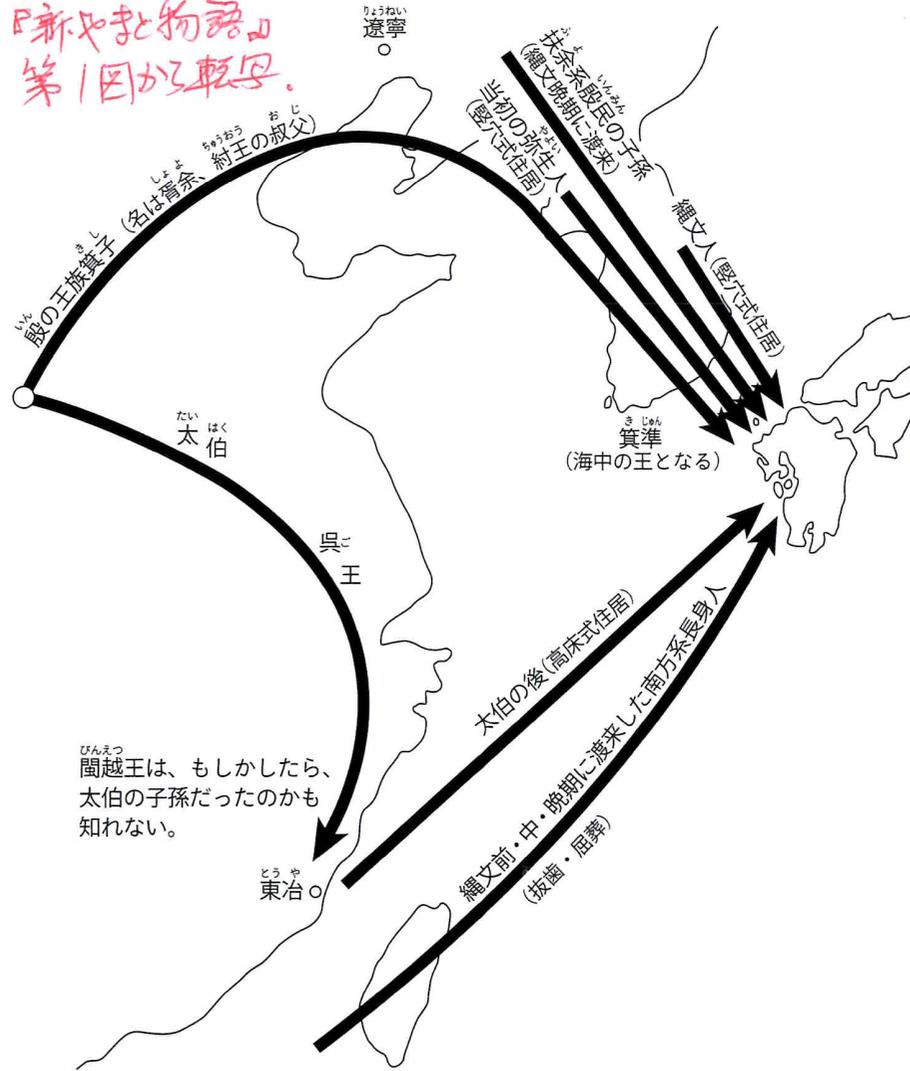
近畿地方の青い文化は、弥生中期末に突然衰退する。その後、高地上に集落が急激に広がる。

追加の文字
赤色。
字の大きさは、他と同じ。

ア点が消えるよう変更

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

・左頁に掲載下さい。
 ・『新やまと物語』
 第1図から転写。



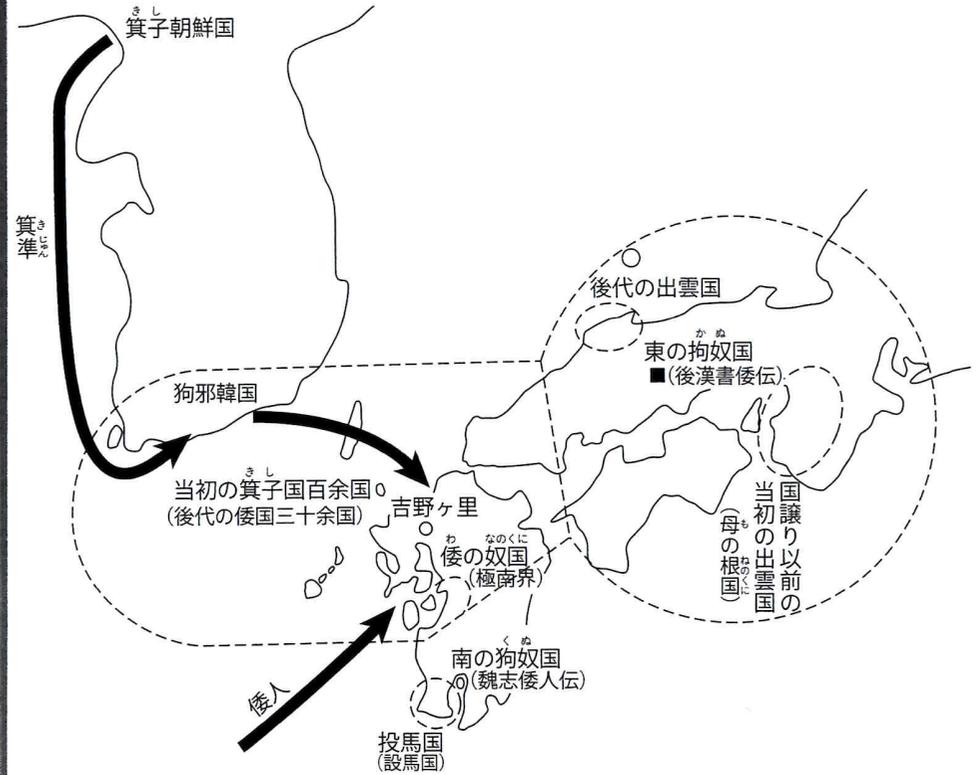
第1図 六つばかりの種族 (想像図)

第3表 弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者		
				九州	中国	近畿
縄文時代	晩期	前300		縄文人		
弥生時代	前期	前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。(『三国志』韓伝)	【箕子達による】 百余国の時代		
		前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位(紀)	【倭人による】 30余国の時代		
	中期	B.C. A.D.	・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 ・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。	倭奴国(極南界)		
	後期	-147 -188	・147 } 倭国大乱 ・188 }	(小銅鐸廃絶)		
古墳時代	前期	-239 -248(?)	・239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 ・248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による】 30余国の時代		
		-300		男王素(素戔嗚)を追放。素、母の根国を建国。(近畿に古墳出現)		
古墳時代	後期	-400	(銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合)	(倭人による統一)		
		-400		出雲国の国譲り 【現在の出雲国へ国替え】 (銅鐸廃絶)		

【注】当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
 (『吉野ヶ里』安本美典、毎日新聞社、156~7頁参照)

- ・ 右頁に掲載
- ・ 『新・ヤマト物語』 第2回から転写。



第2図 東西二つの文化圏の対立 (想像図)

左頁に
配置して
下さい。



写真図版10 聖徳太子像

『廣隆寺』 廣隆寺発行（平成6年の御贈進後に発行）、25頁参照。

- 推古天皇11年11月1日、聖徳太子が秦河勝に仏像を授け、一寺を建立せしめられたのが廣隆寺の開創であり、その当時の太子の御姿を上宮王院に祀っている。製作年代は、平安時代後期の元永3年（1120）である。
- この太子の尊像には古来、歴代天皇の黄檗染の御袍の御束帯（御即位の時着御される衣服、又は宮中の儀式の時お召しになる最高の儀服）が、即位後贈進され、各天皇御一代を通じて着用される御例である。
- 毎年11月22日に1日だけ御開帳される。
- 手前に、履物が揃えられている。

10表 「推古朝」の寺院建立等一覧

緯

西暦 (年)	元号 (年月日)	経緯
593	推古天皇 元年 4月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>厩戸皇子立太子 (20歳)。(紀等)</u> ・<u>是歲「四天王寺」を玉造に造り始めたか。(紀・補闕記等参照)</u> ・<u>等与刀弥々大王、小国日辺日本国の王「粟散王」として即位か。(紀・伝暦・他参照)</u> ・<u>上宮聖德皇、伊予の湯に幸行す。(風土記) [九州へ向かう途中、伊予に立ち寄られたのである]</u>
594	2年 2月1日	
596	4年 10月—	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>九州 (肥後国) に「元興寺」完成か。(紀参照)</u>
598	6年 4月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>上宮王、勝鬘經を講き、播磨国の田300余町を「法隆寺」の地と為す。(法王帝説)</u> ・<u>[用明上皇の為、九州 (肥後国) に「法隆寺」の建立が企図されたか]</u>
600	8年 —	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>倭王、隋に使者を遣わす。(隋書倭国伝)</u>
601	9年 2月—	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>大和国に「斑鳩宮」の造営が企図される。(紀参照)</u>
603	11年 2月—	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>大將軍 (西の国の皇太子押坂彦人皇子) と將軍來自皇子、薨去か。(紀)</u> ・<u>都を豊浦宮から小墾田宮に遷す。 [推古天皇の都は九州 (肥後国) にあったのだらう]</u> ・<u>大槌および鞍を作り、また旗幟に糸がく。 [即位のときなどに、大槌をたてることか、後の例である] (紀)</u> ・<u>冠位12階を制定する。(紀)</u>
604	12年 1月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>冠位を始めて賜う。(紀)</u> ・<u>* 恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、(儲后 (皇太子) となられたのであるう。(補闕記等)</u>
605	13年 4月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>皇太子、憲法17条を作る。(紀)</u> ・<u>「一朝の世となった当初に、「朝臣達の心得」として作られたのではなからうか]</u> ・<u>鞍作鳥を、「元興寺」の丈六の仏を造る工とする。(紀)</u> ・<u>[大和国に「元興寺」建立が企図されたのであるう]</u>
606	14年 4月8日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>皇太子、大和国の「斑鳩宮」に遷る。(紀・伝暦)</u> ・<u>* 用明上皇が、「子、遠く斑鳩に別る。朕の快からざる所なり」と仰せられたのだらう。</u> ・<u>花祭 (誕生会) の是の日 九州の「法隆寺」の為の銅の仏像 (薬師如来像) と、大和国の「元興寺」の為の繡の丈六の仏像とを、並びに造り終わったか。(紀参照)</u> ・<u>是歲 (7月以前に) 推古天皇から賜った播磨国の水田100町は、大和国の「斑鳩寺」に納められたのであるう。(紀)</u> ・<u>[当初の「斑鳩寺」(若草伽藍) の造営が企図されたと解したい]</u>
607	15年 —	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>「法隆寺」のもともとの本尊であったという薬師如来像の開眼式が行なわれ、仕え奉ったのであるう。(薬師如来像光背銘参照)</u> ・<u>[この頃、九州 (肥後国) に「法隆寺」が完成したと想像される]</u> ・<u>隋の客「裴世清」等京に入る。(紀)</u> ・<u>(花祭の) 是の日、大和国の「元興寺」の金堂内に、鞍作鳥が丈六の仏像を入れたのであるう。(飛鳥大仏銘文・紀参照)</u> ・<u>夜半に、大和国の「斑鳩寺」(若草伽藍) 炎上 (補闕記参照)</u> ・<u>* この時、もともとの釈迦三尊像が火中し、小片に砕けたのであるう。</u>
608	16年 8月3日	
609	17年 4月8日	
610	18年 4月30日	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>聖徳太子発病。</u> ・<u>* 釈迦三尊像発願。焼けた釈迦三尊像を基にして、再造することになったのであるう。</u> ・<u>聖徳太子薨去。(49歳)</u> ・<u>釈迦三尊像、発願からわずか13ヶ月あまりで完成。(釈迦三尊像光背銘参照)</u> ・<u>[この頃、「斑鳩寺」(現存する大和国の法隆寺) が再建された、と推察される]</u>
622	30年 1月22日	
623	31年 3月半ば	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>推古天皇、崩御 (75歳)。</u>
628	36年 3月7日	
669	天智天皇 8年 冬	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>大和国の「斑鳩寺」に火災。 [講堂・回廊北半部が焼失し、この時、釈迦三尊像の大光背が損傷したと思われる。また、五重塔4階に飛火したものの、消火されたのではなからう]</u> ・<u>夜半の後に「法隆寺」炎上。(紀) [推古18年 (610) の壬子1巡後、つまり天智9年 (670) の4月30日夜半の後に九州の「法隆寺」が奈良に付されたのであるう]</u>
670	9年 4月30日	

* 現法隆寺は、推古朝の創建跡、一度火災に遭遇している。と奇伝はいる。(「聖徳太子」上原和、講談社、20頁。他参照)

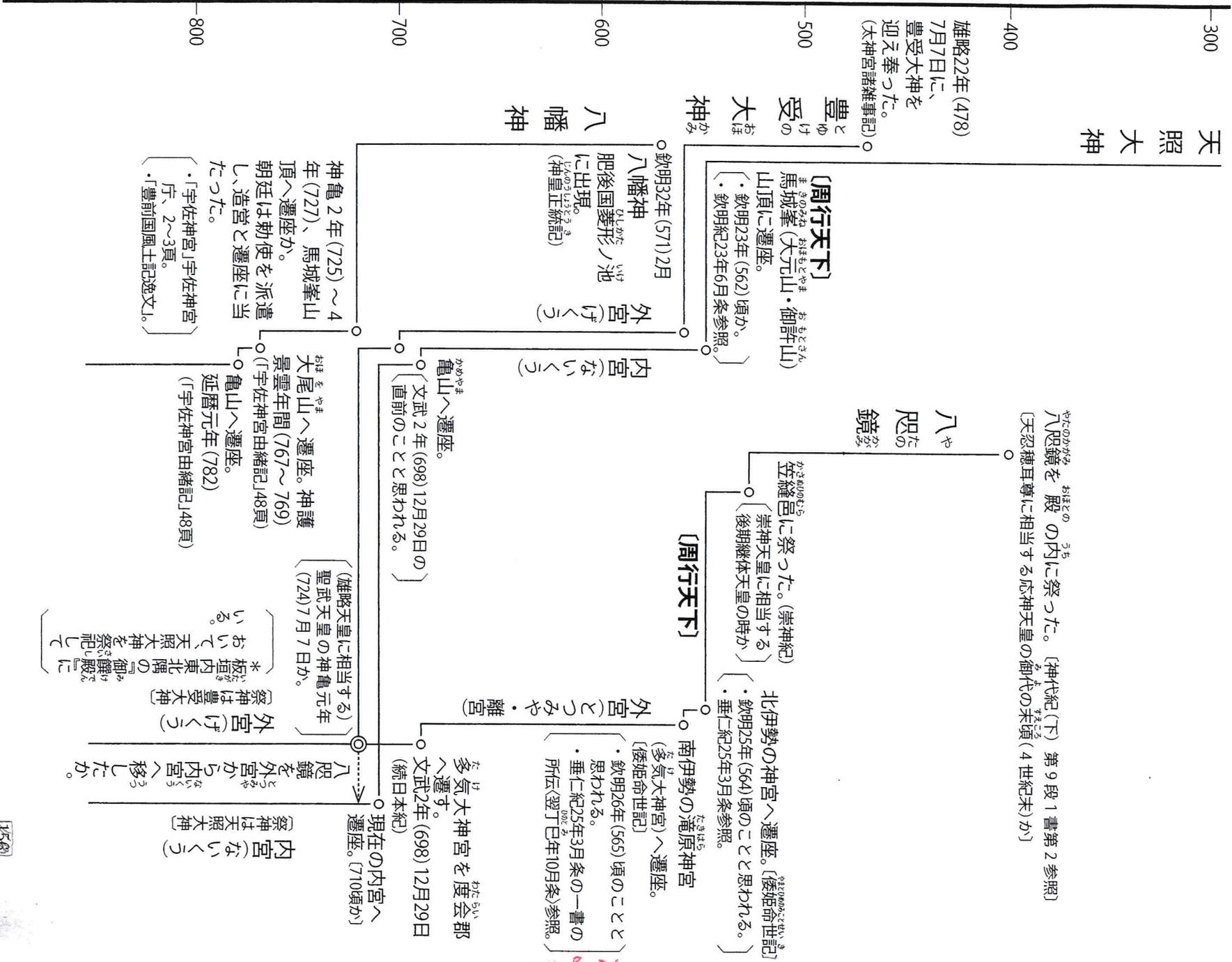


第13図 邪馬台国の「洛陽城」想像図

- 〔注〕①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。
- ②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。
- ③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひしなりといふ」と言い伝えられている。（『菊池郡誌』熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）
- ※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

14²/₂

右頁全面に隈限一杯の生け掲載下さい
 新ヤマト物語第一巻 156頁から170頁 (45頁) 2330から来たから新ヤマト
 (第9巻目) 新ヤマト 100-156頁
 第41表 内宮 (天照大神の宮) ・ 外宮 (豊受大神の宮) ・ 外宮 (天照大神の離宮) ・
 八幡宮の変遷の歴史 (想像)



3392^p 2/6 3059^p - 1/4 新ヤマト - 156 同表 3059^p - 1/2 に 同表

新・やまと物語

第九卷

目次

第1巻

第2巻

①『新・やまと物語』の題目

まえがき

序論

この物語の主張

系譜

荒筋

『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

新・やまと物語

第一編 神代〔先史時代〕応神朝

第一章 天地開闢

第二章 激動の黎明期

第三章 極東地域にみられる各種文化についての考察

第四章 北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代

第五章 東西二つの文化圏の対立(当初の弥生人と箕子の対立)

(以下、インターネット)

第3巻

第4巻

第六章 太伯の後

第七章 倭国創建(会稽の東治から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国)

第八章 垂仁天皇(五十七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢)

第九章 景行天皇(一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢)

第十章 成務天皇(倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く)

第十一章 仲哀天皇

第十二章 神功皇后(息長足姫尊)

第十三章 三国鼎立

第十四章 洛陽の変遷の歴史

第十五章 衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史

第十六章 景初三年春

第十七章 魏国への旅立ち

第十八章 洛陽の都

第十九章 帰途

第二十章 単位

第二十一章 倭国北辺の国々

第二十二章 新王城

第5巻

第6巻

第二十三章 住吉の客人

第二十四章 倭王に拝假す

第二十五章 帰国を延しての倭国での日々

第二十六章 冬至の祭(新嘗祭)

第二十七章 倭国の文化

第二十八章 邪馬台国に現出した洛陽城

第二十九章 龍神の聲

第三十章 相剋

第三十一章 玉匣

第三十二章 東海の島の奇妙な習俗

第三十三章 梯儻の安否をたずねて

第三十四章 日御子の哀しみ・そして死(徑百余歩の塚の内へお隠れになる)

第三十五章 悪阻の儀式(殉葬する者、奴婢百余人)

第三十六章 千餘人もの戦死者を出した内乱

第三十七章 天石窟の儀式(年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式)

第三十八章 女王認知の儀式(大嘗祭)

第三十九章 素戔嗚の偉業

第四十章 倭国の女王田心姫

第四十一章 応神天皇(上)

第7巻

第8巻

第四十二章 朝鮮半島の歴史

第四十三章 応神天皇(中)

第四十四章 東の拘奴国壊滅(中国地方平定)

第四十五章 母国『出雲国』の国譲り(近畿地方を譲り受ける)

第四十六章 応神天皇(下)

第二編 繰り返される二朝の慣例(仁徳朝〜崇峻朝)

第四十七章 第二期共立時代(大雀命・宇遲能和紀郎子)

第四十八章 仁徳天皇

第四十九章 謎の世紀『五世紀』

第五十章 裝飾古墳

第五十一章 近畿地方の古墳

第五十二章 埴輪

第五十三章 隠された二朝時代の概要(第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし)

第五十四章 乎富等大公主(後の継体天皇)の出自について

第五十五章 雄略天皇(「共治国家」「共治天下」を望む遺詔)

第9卷

- 第五十六章 (天上国九州の天皇) 継体天皇
- 第五十七章 (日辺日本国の天皇) 清寧天皇 (白髮武
廣國押稚日本根子天皇)
- 第五十八章 飯豐天皇
- 第五十九章 顯宗天皇 (弘計天皇 (弟))
- 第六十章 仁賢天皇 (億計天皇 (兄))
- 第六十一章 武烈天皇 (仁徳系の王統最後の天皇)
- 第六十二章 時代の圧縮
- 第六十三章 第一期二朝時代の終焉
- 第六十四章 第二期二朝時代の幕開け
- 第六十五章 欽明天皇 (天國排開廣庭天皇)
- 第六十六章 敏達天皇
- 第六十七章 用明天皇
- 第六十八章 崇峻天皇 (朕が嫌しとおもふ所の人を断
らむ)

- 第三編 日本の歴史改編、そしてその後 (推古朝)
- 現代)
- 第六十九章 第三期二朝時代 (天上国の推古天皇・日
辺日本国の等与刀弥々大王)
- 第七十章 推古朝の寺院・仏像

第10卷

- 第七十一章 阿蘇山
- 第七十二章 隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わ
しむ
- 第七十三章 国に二の君非ず
- 第七十四章 皇太子麩戸豊聰耳皇子
- 第七十五章 金人の夢告
- 第七十六章 太子の苦惱
- 第七十七章 聖徳太子の薨去
- 第七十八章 蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
- 第七十九章 舒明天皇
- 第八十章 皇極天皇
- 第八十一章 孝徳天皇
- 第八十二章 斉明天皇
- 第八十三章 高市天皇 (舒明天皇の重祚)
- 第八十四章 天智天皇
- 第八十五章 壬申乱
- 第八十六章 宗像神社
- 第八十七章 天武天皇 (上)
- 第八十八章 新城 (平城宮)
- 第八十九章 天武天皇 (下)
- 第九十章 持統天皇

第11卷

第12卷

第13卷

- 第九十一章 文武天皇
- 第九十二章 元明天皇
- 第九十三章 奈良時代
- 第九十四章 平安時代 (上)
- 第九十五章 小野小町
- 第九十六章 平安時代 (下)
- 第九十七章 南北朝時代 (二朝時代)
- 第九十八章 戦国時代
- 第九十九章 近世 (安土・桃山・江戸時代)
- 第一百章 現代及び未来
- あとがき

- 第五十八章 飯豊天皇
- 第五十九章 顯宗天皇 (弘計天皇 (弟))
- 第六十章 仁賢天皇 (億計天皇 (兄))
- 第六十一章 武烈天皇 (仁徳系の王統最後の天皇)
- 第六十二章 時代の圧縮
- 第六十三章 第一期二朝時代の終焉
- 第六十四章 第二期二朝時代の幕開け
- 第六十五章 欽明天皇 (天國排開廣庭天皇)
- 第六十六章 敏達天皇
- 第六十七章 用明天皇
- 第六十八章 崇峻天皇 (朕が嫌しとおもふ所の人を断
らむ)

追加資料

- 『皇統系譜』
- 『保寿表』
- 『千支表』

『図・表・写真図版索引』……

②『新・やまと物語』第9巻の目録

新・やまと物語

第二編 繰り返される二朝の慣例 (仁徳朝〜崇峻朝)

第五十七章 (日辺日本国の天皇) 清寧天皇 (白髮武

廣國押稚日本根子天皇)

7 挿入F表。(第9巻) 18

2990 3076^{P-1/2}
 3075^{P-1/2}末 3073^{P-1/2} 3075^{P-1/2} 3.126^{P-1/2} 3068^{P-3/2} 3060^P 3075^P 紀上504^P
 3076^{P-1/2} 即位 3074^P 紀上505^P 末

第五十七章 日辺日本国の天皇 清寧天皇

清寧天皇 (白髮武廣國押稚日本根子天皇)

は、日辺日本国の天皇として即位された。大伴空屋大連を大連とし、平群真鳥大臣を大連としたりしたことは、ともに故(雄略天皇の時)のとおりであった。

雄略天皇崩御(四八九)の翌年(四九〇)に即位された清寧天皇は、この即位の年を元年とされた。(第五十六章の冒頭において既に

述) 一、清寧二年(四九一)二月 雄略天皇の遺(詔)の跡を垂水て、

二朝時代が始まったと解される。清寧二年(四九一)二月四日、継体天皇は西の天子として即位され、是の年を継体元年とされた。第一表

と考えてみたり。(継体紀元年二月四日条参照。第五十六章へ継体天皇の擁立の項において既に

述) 継体紀元年二月四日条参照。

天口九門の天皇
 3068^{P-1/2} と合わせる。ルビを。 紀上502^P 「小町」 目次10^P と合わせる。

3069^{P-1/2}

#上(上)439^p ③3140-3/3 189行 P 紀上 508^p ③3140-3/3 3.127-1/5 ③3140-3/3 638補注2 字大カコフ 叙 1015^p 帝すて

参照) なお、忍海郎と共通点があるところから、

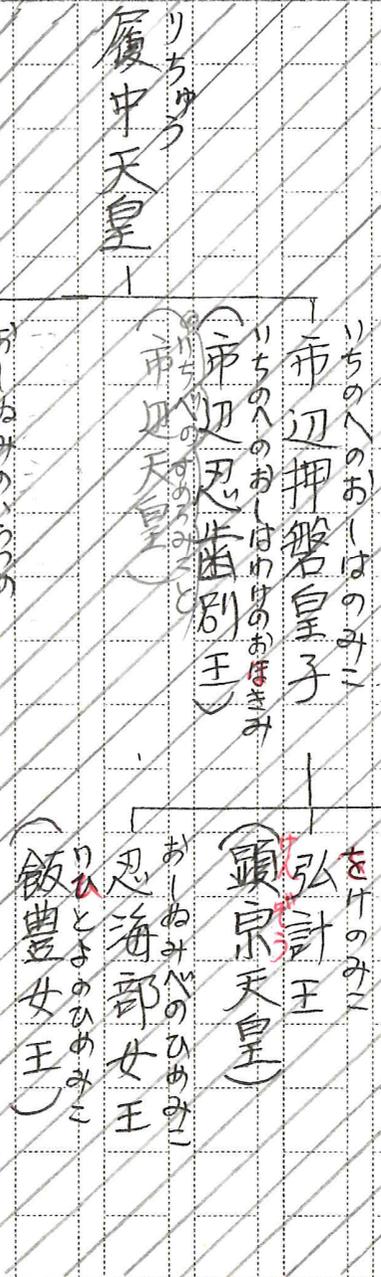
忍海郎女(飯豊王)・億計王・弘計王の三人は、共に、忍海部造によつて、ひそかにかくまわれおられたのかも知れない。などと想像される。

また、少々ややこしいが予め述べると、宗即位前紀に、概略、

億計王の頃にお生まれになった、飯豊女王(忍海部

女王)の頃にお生まれになった、飯豊女王を以つて、億計王の上に列叙してある。と記されてゐる。(第42表参照)

履中天皇から武烈天皇へ至る系譜 (仁賢天皇)



※あるいは、飯豊王と、飯豊女王の二人がおられたのではなからうか。

右頁の縦半分に(1/2)に、大玉に掲載下さし。

1509
[24]

第4表

履中天皇から武烈天皇へ至る系譜 (想像)

履中天皇
リチ

3,127^p - 2/5

お3126^p - 2/2
11行

思海部女
お1娘おひさの
お3126^p - 2/2
11行

敏豊王

市迎押磐皇子
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

市迎速別王
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

市迎天皇
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

思海部女
お1娘おひさの
お3126^p - 2/2
11行

敏豊女王

頭宗天皇
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

弘計王
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

仁賢天皇
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

武烈天皇
お1おひさの
お3126^p - 2/2
11行

お3127^p - 1/5
11行
お3132^p - 2/2
11行

安康記

陸水 195

239 P 1057

リ、身分を隠し、馬甘牛甘としてお仕えになつた。(頭宗即位前紀) 安康記参照
 ①なお、弟の弘計王(後の頭宗天皇)は、この時六歳であつたらう、と推察される。(第五十九章の末尾におりてホバたい)
 ②なお、姉の曰飯豊女王は、この時十七歳であつたかも知れない。(後述)
 扶桑略記の飯豊天皇条に、
 「市辺押磐皇子女。去來穗天皇孫。母莫姫也。甲子歳春二月、生年四十五即位。云々とある。」
 (市辺押磐皇子の女、去來穗天皇の孫、母莫姫也。甲子歳春二月、生年四十五即位。云々とある。)

(1) 清寧紀元年(庚申、四八〇年)の四年後の清寧紀五年(甲子、四八四年)正月に、清寧天皇が崩御された。(紀) 第一表参照
 * 但し、崩御の實年代は、西暦四九四年であつた。(第一表参照)
 (2) 同年二月に、市辺天皇の妹の曰飯豊王が即位された。頭宗即位前紀には頭宗天皇の母とある。
 (3) しかし、この曰飯豊王とは、同年十一月にお亡くなりになった(頭宗即位前紀)

(4) そこで同年に頭宗天皇の姉の市辺天皇の娘の

の四九四年(もとも頭宗即位前紀では甲子の四八四年)

かみ知水なり前頁9行
③ 3126-2/8行
清寧記(里) 255P

③ 3.130^P-2/2ハ移す

3.127^P-5/5

いころ 科殺 ③ 3127-3/5 494 45
③ 3133^P-3/3 466 17
28 28

③ 3129^P-2/2ハ移す
③ 3129^P-2/2ハ移す

いちへのおいけのみこ
市辺押磐皇子の娘

曰 飯豊女王いひとよのみめみこが即位された、
と想察される。

としたら

△ 飯豊女王は、西暦四九四年に四十五歳で

即位されたことになり

逆算すると、押

磐皇子が射殺されたと思われ、西暦四六六年

当時、十七歳であつたと察せられる。

定かでないが、とりあえずこの解

釈してみたい。

(*)

明言なきなりか下もしかたら
清寧天皇は下御自分の御子天子はせ
皇統を仁徳天皇の正当な血筋大戻した
と思は至ら小たのかも知水ない。
清寧天皇は
履中天皇の孫
市辺天皇の子である
計王と弘計王に
お考えはなり
なつた
思われ
日継知
清寧記
要検討

③ 3127-3/5 9行-12行
↑か。

紀上506P 491 見いふふた
458 才9巻20行
33

3,128P 記(5)256P →次頁5行
開きおろしたまひて

由3129P-1/2未入
移した 紀上506P

清寧天皇は驚き嘆息して、良しく心を痛ま
 せながら、
 「めでたリことだ。悦しいことだ。天は大
 きな恵みを垂水賜うのに、二人の兒を以てせ
 られたし
 と仰せられた。(清寧紀二年十一月条)
 ここと、億計王・弘計王の二人にとつて媿
 にあたる飯豊王は、
 ちか名のり出てきた
 と聞くと、非常に歡んで、宮
 へ上るようになり取りはからぬれた。(清寧記)
 清寧三年正月に、億計王と弘計王を宮中に
 迎えた。
 *そして、同年四月に、兄である億計王を皇
 太子とし、弟である弘計王を皇子とした。(清
 寧紀三年条参照)

(*)

かみ知れなり 前頁へ行
 ⑦3126-2/2 8頁
 清寧記(皇) 255P

⑦3127-5/5 か
 移左。 3.129^P

いころ 耕殺 土山 ⑦3127-3/5 494 45
 ⑦3133-3/3 466 17
 28 28

⑦3128 とかがぶり
 とすれば ⑦3129P
 7-8頁

小 子 答 だ
 計 王 弘 計 王
 履 中 天 皇 の 孫
 市 辺 天 皇 の 子
 清 寧 天 皇 は
 思 へ 至 ら ぬ だ
 明 言 だ
 清 寧 天 皇 は
 皇 統 を 仁 徳 天 皇 の 正 当 な 血 筋 と 戻 した
 御 自 分 の 御 子 だ
 天子 だ
 父 市 辺

飯 豊 女 王 は 西 暦 四 九 四 年 十 五 歳 で
 即 位 さ れ た こ と に な り
 逆 算 す る と
 推 算 さ れ た こ と に な り
 當 時 十 七 歳 で あ っ た こ と に な る
 定 か で な い か
 一 つ あ え び こ う 解
 推 して み た い

市 辺 押 磨 皇 子 の 娘
 市 辺 押 磨 皇 子 の 娘

